

Semantic Relations of Participial Constructions to Main Clauses in English

英語における分詞構文と主節の意味関係

人文学部 人間文化課程 欧米文化コース

寺町咲希

はじめに

本論文は、分詞構文が主節に対してもつ多様な意味関係を決定する要素が何であるかを明らかにすることを目的とする。扱うのは分詞節と主節の主語が一致したものである。一般に分詞構文(participial construction)と呼ばれるものは、従属節の接続詞と主語を省略し、動詞を-ing形に変化させた文である。(1a)は従属接続詞を持つ文で、(1b)はそれを分詞構文に書き換えた文であり、同じ意味を持つ。

- (1) a. Because we live in the country, we have few amusements.
b. Living in the country, we have few amusements.

以下では分詞構文という言葉をも、文全体ではなく分詞節のみを指すこととする。

1. 先行研究

Stump(1985)は、Carlson(1977)が提唱した stage-level 述語と individual-level 述語の区別を用いて、分詞構文と主節の意味関係を明らかにしようとした。

- (2) a. Wearing that new outfit, Bill would fool everyone.
b. Being a master of disguise, Bill would fool everyone. (Stump(1985:41))

主節に法助動詞がある場合は、(2a)のように分詞構文に stage-level 述語が生じると「条件」の解釈となり、(2b)のように individual-level 述語が生じると「原因・理由」の解釈となる。

- (3) a. Carrying a load of over 1500 lbs., our truck often makes the bridge shake.
b. Weighing four tons, our truck often makes the bridge shake.
(Stump(1985:98))

主節に頻度の副詞がある場合は、(3a)のように分詞構文に stage-level 述語が生じると「時」や「付帯状況」の解釈となり、(3b)のように individual-level 述語が生じると「原因・理由」の解釈となる。

(4) a. Wearing her new outfit, Mary looks fat.

b. Weighing over 200 lbs., Mary looks fat.

(Stump(1985:99))

主節に総称表現がある場合は、(4a)のように分詞構文に stage-level 述語が生じると「時」の解釈となり、(4b)のように individual-level 述語が生じると「原因・理由」の解釈となる。

Iwabe(1986)は、Stump(1985)による(5)の解釈に異議を唱え、分詞構文の意味解釈に関する新たな判断基準を設けた。Stump(1985)は、existential reading をもつ句と共起する *be* は stage-level 述語でも individual-level 述語のように解釈できると考えたため、(5a)を「理由」で解釈して(5b)を「条件」で解釈した。

(5) a. Being asleep, Rover might not seem so ferocious.

b. Asleep, Rover might not seem so ferocious.

(Iwabe(1986:4))

しかし、Iwabe(1986)はどちらも「理由」で解釈できると述べている。stage-level は *be* や *have* を伴うと命題的になり、individual-level 述語と同等に扱うことができるからだという。

早瀬(2002)は、多様性の要因が分詞構文と主節の間の「同時性」であるとした。例えば「原因・理由」の意味解釈は、(6)に示されているように、3つのパターンに分けることができるという。

(6) a. Standing a little over five feet tall, Tazio Nuvolari became the greatest driver of his era.

b. Having made his choice, he stayed with it.

c. Not having any money, he was at a loss.

(早瀬

(2002:169))

1つ目は、(6a)のような分詞構文に individual-level 述語がくる場合である。恒常的な状態は常に主節との「同時性」を満たす。2つ目は、(6b)のような完了形がくる場合である。完了形で表された動作の結果状態は半永久的に続くので、主節との「同時性」が成り立つ。3つ目は(6c)のような否定形がくる場合である。not は性質上、時間とは関係なく「事実」を表すことができるため、主節との「同時性」が認められる。

2. 先行研究の問題点

先行研究の不十分な点を指摘したい。まず、Stump(1985)が明らかにした意味関係では、分詞構文における例のごく少数しか扱うことができない。(7)のような分詞構文は stage-level 述語であるにもかかわらず、「原因・理由」で解釈されるので stage/individual の分類では説明することができない。

(7) a. Feeling a little embarrassed, he quickly cleared his throat and glanced up at the clock. (BNC)

b. Fearing for her continued economic well-being, Mary began to work this year. (早瀬(2002:170))

また、Iwabe(1986)の説によって説明できる例は、Stump(1985)の例からあまり増えない。早瀬(2002)の説に対しては、「原因・理由」の解釈に関する不備を2つあげる。1つ目は「事実」を示す *not* の性質が明記されていないこと、2つ目は「事実」と「事態」を使った説明に妥当性があるのかということである。

3. stativity と意味解釈

これらの問題点を踏まえたうえで、代案を示す。私は、stativity という考え方をを用いて分詞構文と主節間の意味関係を説明できると考える。この stativity というものは、状態を表すか表さないかということであり、Vendler(1967)の分類に基づくものである。彼は、動詞をアスペクトの観点から状態、活動、到達そして達成の4つに分類した。各々の特徴は(8)に示すとおりである。

(8) States:	stative	durative	unbounded
Activities:	dynamic	durative	unbounded
Achievements:	dynamic	punctual	bounded
Accomplishments:	dynamic	durative	bounded

本論文では、state に分けられる述語を stative 述語、それ以外の3つに分けられる述語を non-stative 述語とみなし、議論を進めていく。

認める意味解釈は、「原因・理由」(=*because*)、「同時」(=*while*)、「継起」(=*when*)、「条件」(=*if*)、「譲歩」(=*although*)の5つとする。「付帯状況」と呼ばれる解釈は、「同時」と「継起」に分類できる。分詞構文が non-stative 述語をとるとき、その意味解釈は「同時」、「継起」、「条件」のいずれかになる。反対に stative 述語をとるとき、「原因・理由」、あるいは「譲歩」の解釈になる。

「同時」は(9)のような文で、分詞構文の出来事が続いている間に主節の出来事が発生したと考えられるものである。

(9) a. Driving to Chicago that night, I was struck by a sudden thought. (Quirk *et al.*(1985:1121))

b. Ben, whistling happily, services his car in preparation for the long drive North.

(BNC)

また、「継起」には(10)のような例文がある。

(10) a. Arriving in Coober Pedy at sunset, I noticed the desert sky was streaked with red
like a fire opal. (BNC)

b. Removing his corduroy jacket, he hung it on one of the books.

(赤野・藤本(1993:5))

1つ目の出来事が終わった後に、次の出来事が起こるものである。これら2つの解釈には、述語のAspectにおける違いがある。「同時」の分詞構文には、活動述語あるいは達成述語がとられ、到達述語は生じることができない。なぜなら、ある程度幅のある動作が要求されるからである。瞬間的に動作が終了する到達述語は適さないといえる。一方、「継起」の分詞構文は、動作の終点を含意する到達あるいは達成の述語をとる傾向がある。もちろん、動作の終了が読み取れる場合は活動述語も置くことができる。「同時」と「継起」の違いが表れた文が(11)である。同じ動詞を用いているが、(11a)は while 節で(11b)は when 節で書き換えられる。

(11) a. Walking around the park, I thought of him.

b. Walking to the station, I bought a ticket for London.

なぜ、これらの「時」の解釈をもつ分詞構文が non-stative 述語をとるのかということ「時」の解釈をもつ文は、単に二つの動作を表現しているからだ。when 節や while 節を含む文には2つ以上の動作が表されるが、stative 述語は動作を示さないのでこれらには適さない。

次に、「条件」を表す分詞構文を考察する。(12)のような if 節で書き換え可能な文である。これらもまた、non-stative 述語をとる。

(12) a. Used economically, one box will last for two weeks.

b. The same thing, happening in wartime, would amount to a disaster.

「条件」を表す文の主節は、分詞構文の出来事が起こったときに起こるだろうことを示している。したがって、分詞構文の出来事は実際には起こっていない。しかしながら、「条件」の分詞構文において stative 述語が現れる場合がいくつか存在する。この点を、(13)を例にとり考えてみることにする。

(13) Lying on the beach, you can get better tan than at home.

(Stump(1985:65))

(13)の分詞構文は「条件」で解釈される。stative 述語でありながらも、一時的状態を表す stage-level 述語に分類されるものであるからだ。一般的に、「条件」を表す文の主節には法助動詞がくるため、Stump (1985)が明らかにしたもの一つに分類できるといえる。それゆえ、条件の分詞構文に関しては、stativity を用いるより Stump(1985)の説を採用するのが妥当である。

次に、stative 述語をとる分詞構文を考察する。初めに「原因・理由」の解釈を見ていく。(14)の分詞構文は、because 節で書き換えられる分詞構文である。

- (14) a. Knowing he had no time to go home, he decided to do without lunch. (König(1995:82))
b. Being a farmer, Tom gets up early in the morning. (湯本(2008:47))

「原因・理由」の分詞構文を伴う文では、動作は主節において 1 つだけ表される。分詞構文によって表される事象は動作ではなく、主節の動作の動機を表しているからだ。

次に、having を伴う分詞構文を考えていく。述語は non-stative であるが、having が伴うと stative 述語としてみなすことができる。

- (15) a. I knew Washington quite well, having visited it two or three times while I was at Amherst in 1969. (BNC)
b. Having failed twice, I don't want to try again.

これらの have はいわゆる経験の have と呼ばれるもので、「何かを経験した後の状態を表している」と考えられる。そのため、once や before、never のような副詞を伴う場合が多い。さらに、(16)のような not を伴う分詞構文も、stative 述語として考えることができる。

- (16) Not finding anything to do, we strolled around. (早瀬(2002:169))

not によって表されることは、実際に起こったものではない。焦点が当てられるのはその動作自体ではなく、それが起こっていないという状態なのである。

次に、「譲歩」の解釈について考えていく。「譲歩」の分詞構文は、「原因・理由」の意味関係と似た性質を持つと考える。(17)を見ていただきたい。

- (17) a. Sitting in the sun, I still feel cold.
b. You can't believe that they can still say it, having had this conversation six

hundred times.

(BNC)

(17a)を例にとって考える。普通、太陽の下に座っていると暖かく感じられるものであるが、「譲歩」の解釈では、因果関係の結果の部分が「原因・理由」と反対になっている。それゆえ、分詞構文と主節の意味関係は「原因・理由」と類似しており、stative 述語をとる。

最後に、複数の解釈をもつ分詞構文を考えていく。状態と活動両方の用法を持つ動詞も、stativityによって解釈を決定づけることができる。この点を、(18)を例にとり考えてみることにする。

(18) a. Thinking of him, I walked to the library in the next town.

b. Thinking that I had gotten fat, I walked to the library in the next town.

(18a)の Thinking of him は「彼のことを考える」という活動を表しているため、while 節で

書き換えるのが妥当である。(18b)の Thinking that I had gotten fat は「自分を太ったと思う」という状態を表しているため、because 節で書き換えるのが適切である。

前述で、経験の have を伴うものは「原因・理由」の解釈をとるとしたが、分詞構文に現れる have には、以下の(19)のような完了の have もある。

(19) a. Having read the instructions, he snatched up the extinguisher. (飯田
(2000:22))

b. Having finished my work, I went out for a walk.

これらは、先の動作と次の動作の時間関係を明白にするために用いられた have である。そのため、when 節よりも after 節で書き換えるのがより妥当である。先の動作が終了したこと自体に焦点が置かれている場合は、完了の have つまり after 節で訳され、その動作が終わった後の状態に焦点が置かれている場合は、経験の have つまり because 節で訳される。

(20) Having destroyed the evidence, he was confident that he wouldn't be arrested.

(早瀬(2002:169))

したがって、(20)のような分詞構文は証拠が破棄されたこと自体ではなく、破棄されたあとで生じる結果状態に着目されているため「原因・理由」の解釈となる。

以上に示したように、stativity という概念をつかうことで主節と分詞構文の意味関係を説明することができる。(21)のような例文は、いずれも「原因・理由」で解釈されるが、

Iwabe(1986)の命題的/非命題的の考え方をいわずとも、単に分詞構文が状態を表しているということによって説明できる。

(21) a. Being clean-shaven, Harold would look like something like my brother.

b. Clean-shaven, Harold would look like something like my brother.

(Iwabe(1986:4))

結論

英語における分詞構文と主節の意味関係は、分詞構文の *stativity* によって説明することができる。non-stative 述語は「同時」、「継起」、「条件」の解釈をとり、stative 述語は「原因・理由」または「譲歩」の解釈をとる。また、non-stative 述語であっても経験の *having* や *not* を伴う場合は stative 述語と同様に扱うことができる。

主要参考文献

安藤貞雄(2005) 『現代英文法講義』 開拓社

Carlson, G.(1977) *Reference to Kinds in English*, University of Massachusetts doctoral dissertation

波多野満雄(2013) 「分詞構文について」『白山英米文学』 38, 東洋大学, pp.19-39

早瀬尚子(2002) 「第6章 分詞構文カテゴリーのネットワークと拡張」『英語構文のカテゴリー形成 —認知言語学の視点から』, 勁草書房, pp. 149-162

Iwabe, K.(1986) "Semantic Interpretation of Free Adjunct Constructions", *Tsukuba English Studies* 5, Tsukuba English Linguistic Society, pp.1-13

König, E.(1995) "The Meaning of Converb Construction", Martin H. and Ekkehard K. (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective: Structure and Meaning of Adverbial Verb Form*, Mouton de Gruyter, pp.57-95

中島平三(2001) 『最新英語構文事典』, 大修館書店

Quirk *et al.*(1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman

Stump, T.(1985) *The Semantic Variability of Absolute Constructions*, Reidel

Vendler, Z.(1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press

湯本久美子(2008) 「現在分詞構文における Metonymic motivation」『青山学院女子短期大学紀要』 62, 青山女子短期大学, pp.27-73

Corpus

British National Corpus (BNC)